

《鴨は暑い日中はあまり動きません。畦で昼寝をしています。

学生たちが泥だらけになりながら草取りする姿を横目で眺めながら、畦に登つたりのんびり田んぼの中を泳いでいました。

すくすくと伸びた白藤の田んぼを見ながら生産者の阿部がレクチャー。

田植えの時から3倍近く伸びました。

人間にたとえると高校生ぐらいの鴨。

たんぽで草取りをするのはだいたい1ヶ月ぐらいです。

手押し一輪車の除草機。学生では力が足りず泥に潜ってしまい、なかなか前に進みません。

《さすが！家政大生。朝の4時半に長岡についてすぐに24時間スーパーで買出しをし、あつという間に料理開始。朝ごはんとお昼ごはん用のおにぎりを手際よく作っていました。》

# クイーン俱乐部だより

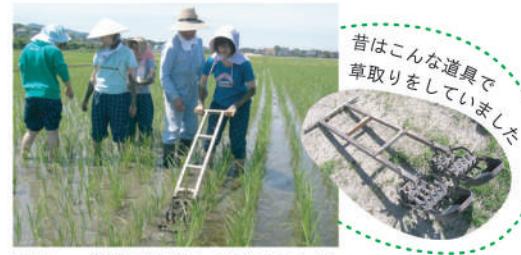


# 7月号

産学地域連携 Project

東京家政大学の学生と 第2回

幻の酒米「白藤」復活に挑戦！



## Dr 中村の お米の話



中村 信也(なかむら のぶや)

整形外科医師。東京家政大学家政学部栄養学科教授として教鞭をとり、「食と医療」の医療薬膳研究の第一人者として活躍中。

## 第7回 除草機

懐かしい響きがあります。私の田舎(鹿児島)では「田車」と呼んでいましたが、皆さんのお所では何とよぶでしょうか。除草機ですからどんな草でも取つてみせる、ということになりますが、\*に図らんや田の草取り専用です。だから、一年のうち出動するのは数回で、後は倉庫の肥やしという存在でしたが、今は消えてしまいました。除草機は雁爪と呼ばれる潮干狩り用具の親分みたいなものが進化したもので、除草機は動力部と除草部からなります。これで草をぱつぱつと引き抜いていくという荒っぽいものです。車輪は縦二連式もあれば、横二連式もあります。(使用経験のない方に説明してもわかりづらいとは思いますが。)

私は除草機といえば蛇と蛙を思い出します。蛇がやたらと出る田で除草機を押していくと、蛇がのんびりと前を横切っていきます。ある日、蛙がものすごい速さで通り過ぎていきました。その後を蛇が「これまた凄い速さで通り過ぎていきました。どちらの目も血走っていて、生存競争を目の当たりにしました。

そういう思い出深い農機具もトラクターの出現で消えました。代わりに除草農薬が出現しました。農薬は手軽で、人で要らずに田から草はきえましたが、蛇も蛙も泥鰌(どじょう)も消えました。私の飼い猫も水を飲み死にました。やがて、田から生き物が減るのは行き過ぎと人々は悟り、人手の代わりに鴨が出現しました。大変な進化ですが悲しい鴨の運命を伴います。これら鴨の幸せを考えた農業に進化してほしいものです。

\*あいはんや…考えもしない、以外にも